

人とともに 地域とともに 島根大学

*shimadai

広報しまだい
Shimane University

2026.04 Vol.63 | 最終号



*shimadai

広報しまだい
Shimane University

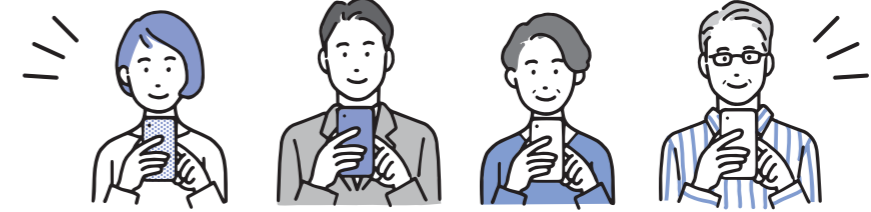
Vol.63

2026年4月発行 編集・発行/島根大学
〒690-8504 松江市西川津町1060 TEL 0852-32-6603 FAX 0852-32-6630 <https://www.shimane-u.ac.jp/>

島根大学の 公式SNSのご紹介

島根大学が発信している
公式SNSアカウントをご紹介します。
大学をもっと身近に感じていただける
内容が盛りだくさんです。
ぜひ、ご覧ください！

大学の
最新情報を
発信！！



Facebook

島根大学の「今」を広く皆さんにお知らせしています。

ここから
Check!



X

島根大学の最新ニュースや日々のできごとについて発信しています。

ここから
Check!



Instagram

島根大学をより身近に感じられる
ビジュアルコンテンツが盛りだくさん！

ここから
Check!



LINE

高校生・受験生・地域の方々に役
立つ情報を定期的にお届けします。

友達追加!



YouTube

リアルな大学生活を、学生や教員
の声を通じて発信しています。

ここから
Check!



島大をもっと
深く知るなら…

Web
サイトへ! >>>



Shimane University Introducing the official SNS

Vol.58-63

2024.7-2026.4

この先へと続く歩み

地域創生、グローバル化、教育改革などをテーマに、社会の中で果たす大学の役割を多角的に発信。「広報しまだい」は63号で役目を終え、新たな時代に向けた媒体へと変化します。



2024 先端材料研究開発協創機構を設置

2025 産学協創
インキュベーション
センター竣工

Vol.31-44

2017.1-2020.4

島根大学の強みを発信

研究拠点や教育の特色など、島根大学ならではの強みや挑戦を掘り下げて紹介。大学の方向性や研究力を、より立体的に社会へ伝える広報へと進化しました。



2017 人間科学部設置

2018 内閣府「地方大学・地域産業創成交付金」に「先端金属素材グローバル拠点の創出 - Next Generation TATARAPROJECT-」が採択



2016 大学院教育学研究科に教育実践開発専攻(専門職学位課程)を設置



2015 地(知)の拠点大学による地域創生推進事業(COC+)採択



2019 教育学部附属義務教育学校開校



2019 教育学部附属義務教育学校開校



2019 島根大学開学70周年記念事業

Vol.20-30

2014.4-2016.10

地域とともに歩む大学

産学連携や地域連携の取り組みが広がり、大学が地域社会とどのように関わっているのかを伝える特集が増えていきました。



2023 材料エネルギー学部を
設置



2019 教育学部附属義務教育学校開校



2019 島根大学開学70周年記念事業



2014.4-2016.10

地域とともに歩む大学

産学連携や地域連携の取り組みが広がり、大学が地域社会とどのように関わっているのかを伝える特集が増えていきました。



2013 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)採択

Vol.45-57

2020.8-2024.4

変化する社会に対応し続ける

コロナ禍を経て、教育・医療・研究の現場が社会と強く結びつく時代に。変化の中で大学が果たす役割や、現場の声をリアルタイムで伝えてきました。



2023 材料エネルギー学部を
設置



2023 島根大学
ロゴマークリニューアル

次ページへ



「広報しまだい」では、大学の出来事とともに、大学での学びを経て、さまざまな分野で活躍する人たちの姿を伝えてきました。

次ページからは、これまで本誌に登場した卒業生の中から4人に取材し、島根大学での学びと、その後の歩み、そして現在について紹介します。

特集
1

大学と地域・社会の懸け橋として 「広報しまだい」が 伝えてきた、大学の姿

「広報しまだい」は、2005年の創刊以来、国立大学法人化や島根医科大学との統合後の新たな歩みとともに、本学の教育・研究の成果、学生・教職員、卒業生の活躍をお伝えしてきました。大学と地域・社会をつなぐ媒体として、その時々々の「今」を切り取ってきた本誌も、今号をもって最終号となります。本号では、「広報しまだい」の歩みを振り返るとともに、過去に登場いただいた方々の現在の姿をお届けします。

長きにわたり「広報しまだい」をご愛読いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。4月より本誌はデジタル版として生まれ変わり、地域や社会に向けて、より積極的に情報発信を行ってまいります。今後とも島根大学の活動に関心をお寄せいただけましたら幸いです。

島根大学長 大谷 浩



Vol.07-19

2010.11-2014.1

卒業生との対話から大学を語る

卒業生と学長によるスペシャル対談を軸に構成。大学での学びが、その後の人生や仕事にどうつながっているのかを掘り下げて伝えました。

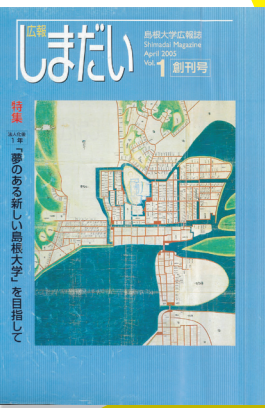


Vol.01

2005.04

2005年4月創刊

2004年の大学再編から1年。新たな島根大学としての歩みを届けるものとして創刊。大学の教育・研究・医療の姿を、地域に広く伝える広報誌としてスタートしました。



2004 国立大学法人法の施行により、国立大学法人島根大学となる

Vol.02-06

2005.12-2010.8

大学の「いま」を社会へ

地域で活躍する学生や地域貢献の取り組み、教員の幅広い研究の紹介など、その時々々の大学の動きを紹介してきました。



2011 附属病院新病棟完成式典



2013 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)採択



西日本旅客鉄道株式会社 経営戦略部
小川 千春 さん (現姓は竜田)
島根大学 法文学部 社会文化学科 2009年卒業



当時の記事
「広報しまだい」vol.04 2009年3月号より
「しまね観光大使」に選ばれ、地域の中で活動する学生として紹介。学業と両立しながら、「しまねの顔」としてPR活動する姿が表紙を飾りました。



企業の思いを、社会に伝える。

島根県出雲市に生まれ、幼いころから「地元で暮らしたい」と思っていたという小川千春さんは、現在、大阪梅田に本社を構える西日本旅客鉄道株式会社（JR西日本）に勤務。本社で企業全体の方向性や価値を社内外に伝える部署に所属しています。戦略に関わる企画や情報発信を担う中で、島根大学時代に経験した「しまね観光大使」などの活動を通して培ってきた視点が活かされています。

17 years later

島根大学で見つけた、幅広い視野



ずっと抱き続けた
「地元が好き！」という思い

出雲で生まれ育ち、美しい風景や城下町の空気が、温かな人との関わりなど、地元への思いが強かったという小川さん。進学にあたっては、「地元の国立大学である島根大学へ行こう」と、それ以外の進路は考えてもいなかったんです」と話します。他県から進学してきた友人の言葉や、社会学や地理学における地域活性化などの学びによって、幼い頃から身近だった風景や人の営みをあらためて言葉にし、捉え直す時間を積み重ねていきました。



観光大使としてのPRイベントのひとつ。「失敗したり悩んだりしたこともありましたが、すべての経験が私の大切な宝物」と小川さん。

もっと多くの人に知ってほしい」。そんな率直な思いからスタートした観光大使としての活動を通じて、より深く地元の魅力を知るようになりました。一方で、東京や大阪でPR活動する機会が増えたことで、島根以外の地域の魅力も知ることができたとはいいます。

学業とアルバイト、そして就職活動とも並行しての観光大使の活動。「びっくりするほど忙しかったけれど、多様な視点が身につけられた貴重な経験だった」と振り返る小川さん。地元では当たり前の風景や文化が、他の地域の人にとっては新鮮に映ることを知ったのも大きな学びになりました。

現在の勤務先である西日本旅客鉄道株式会社（以下、JR西日本）も、観光大使として活動する中で出会った企業。地域に根ざす仕事を希望していたため「公共交通を担うだけでなく、地域観光や活性化にも力



を入れていると知って興味を持つようになりました。地元愛から担った観光大使の活動が、将来へと結びついた瞬間でした。

培った視点を企業の中で生かす選択
JR西日本に入社した小川さんは、鳥取県内にある米子支社（現在の山陰支社勤務から社会人としての一歩を踏み出しました。学生時代から親しんできた山陰地域で「働く側」となったことで、通勤の道や駅の風景、利用する人たちの表情などが、これまでとは違って見えるようになったそう。地域に暮らす人たちの生活を企業の一員として支える業務の中で、大学時代に培ってきた視点が活かせる機会も増えたといえます。

地域の暮らしと鉄道が密接に結びついていることを実感した支社での勤務を経て、2016年には大阪梅田にある本社へと異動。現在は、JR西日本グループのパスである「私たちの志」を社内外へと発信する仕事に従事しています。お客様に企業イメージを伝えるCMの制作や放映、社内に向けた社内報の記事作成、社員参加型のワークショップの運営など、その業務は多岐に渡りますが「社会における企業の存在価値やありたい姿を伝えるために、さまざまな方法を考え、多くの人たちとカタチにしていくのは大変だけれど楽しい」と話す小川さん。

JR西日本という企業の中で、社員と経営層、地域と企業をどうつなぐかを深く考える業務には「観光大使時代に培ってきた、相手に合わせて言葉を選ぶ力や背景を整理して伝える経験が生かされています」。常に「どうすれば伝わるか」という視点を大切にして、日々の仕事に向き合っています。

島根から出るとは思ってもいなかったという小川さんですが、転勤を機に地元を離れたことで、より愛着も増したそう。どんなに離れても地元を思う気持ちに変わりはありません。自分の生きる場所を誇らしく思う、その気持ちこそが、たくさんの人たちの大切な場所を支える企業の、ありたい姿を伝えていく日々につながっています。



フリーアナウンサー・シンガーソングライター
森光七彩さん

島根大学 法文学部 社会文化学科 2016年卒業



当時の記事
「広報しまだい」vol.22 2014年10月号より
小学生の頃に作詞した「アオギりのうた」の作者として紹介。広島市にある母校で開催されたコンサートの様子とともに「アオギりのうた」の歌詞も掲載されました。



声と音楽で、
笑顔をつないでいく。

生まれ育った広島を拠点にフリーアナウンサーとして活動する森光七彩さん。ラジオパーソナリティや番組ナレーターを務める一方、シンガーソングライターとしての演奏や指導にも携わるなど、表現の幅を広げています。ふたりの男の子の母としての顔も持つ森光さん。現在の姿をたどっていくと、島根大学で過ごした4年間で、いまの働き方と生き方を支えていることが見えてきました。

「いい子でいなくていい」
時間がくれたもの
広島で、子どもたちを中心に歌い継がれている「アオギりのうた」という曲があります。平和への願いを込めたこの歌は、広島市内の学校行事や集会など、さまざまな場面で親しまれてきました。この歌を小学生の頃に作詞したのが、森光七彩さんです。「アオギりの子」と呼ばれ、周囲から注がれる期待の中で過ごす日々。中学、高校でもそのイメージは変わらず、知らず知らずのうちに「ちゃんとしていなければ」「いい子でいなければ」と意識するようになっていました。

東京での音楽大学進学を断念して島根大学へと進学した森光さん。「挫折か



らスタートした大学生活だった」といいますが、その島根での生活が思いがけず多くのものをもたらします。「島根では誰も私のことを知らなかった。おかげで肩の力が抜けたんです」。特別な肩書きから離れ、ひとりの大学生として過ごせる日常がありました。

森光さんが本来の性格を取り戻したきっかけは、大学で出会ったダンスサークルの友人たちでした。鏡のある場所を探しては踊り、練習に明け暮れる毎日。副部長としてサークル運営にも関わり、人前に立つこと、仲間と何かをつくることの難しさや楽しさを経験したそう。また、教育実習での授業づくりやアルバイト先で任されていた館内放送など、人に伝えること、相手と向き合うことを繰り返

12 years later

島根大学で見つけた、本来の私

返し体験する中で、自分が目指したいことが見えてきたと話します。

「東京に進学していたら、重圧からずっと逃れられなかったかもしれません」。森光さんにとって島根大学で過ごした4年間は、周囲から与えられていた役割や期待から少し距離を置き、自分自身を取り戻していく時間でした。大学時代の経験が、現在の森光さんの基盤になっています。

島根で育んだ自分らしさを、
いまの暮らしへ

卒業後の進路を本格的に考えるようになった頃、森光さんは偶然、NHK広島のカスタマー募集を目にします。ダンスサークルの友人に教室で撮ってもらった写真を添えて応募したところ、採用が決定。卒業式の翌日には生放送の現場に立つていました。

取材の現場では、表面的な言葉だけでなく、その人が何を考え、何を伝えたいのか、その背景や思いに耳を傾けることが求められます。大学のインタビュー実習などで培った「相手の話をじっくり聞き姿勢」が、そのまま仕事に生かされていきました。授業やサークル、アルバイトなどで人の話をじっくりと聞いた経験が、現場での判断や言葉選びの土台になりました。

NHKで経験を積んだのち、フリーアナウンサーとして活動を始めた森光さ



鍵盤奏者の父、東京で活躍するベーシストの弟とのコンサート風景。将来は息子たちも含めた「3世代演奏」を実現することが目標とのこと。

ん。局や番組ごとに求められる役割は異なりますが、取材や番組制作を通して、地域で暮らす人の声や出来事に耳を傾け、言葉として届ける姿勢は変わりません。第二子が生まれたばかりの現在は、仕事の量を調整しながら、決まった時間にスタジオへ向かい、収録を終えたら日常に戻る。そんなリズムの中で、仕事と暮らしを歩き来しています。

大学時代に培ってきた、人と向き合う姿勢や、新しいことへの挑戦と経験。パートナーとの出会いも島根だったという「島根大学に行ってなかったら夫にも息子たちにも出会えていないと思う」と感慨深く……。島根での時間は、私にとってかけがえない時間でした」と笑顔で振り返る森光さん。日々の仕事と暮らしの中で、島根で紡がれた縁に支えられながら、自分らしく歩み続けていきます。



株式会社ナチュラニクス代表取締役
金澤 康樹 さん

島根大学 総合理工学研究科博士後期課程 2016年修了



当時の記事
「広報しまだい」vol.26 2015年10月号より
島根大学発ベンチャー企業2社目として起業した学生として紹介。大学や地元企業のバックアップを受けて事業化を進めた経緯や会社の事業内容について伺いました。

技術×ビジネスモデルで、世界中に電気を届ける。

島根大学在学中に立ち上げたスタートアップ企業の代表として、現在も国内外の企業や行政と連携しながら事業を展開している金澤康樹さん。大学での研究を起点として、社会課題の解決へとつなげる事業に取り組んでいます。研究者ではなく経営者という道を選び、研究成果を社会に実装していく道を選んだ金澤さん。その選択の背景には、島根大学で過ごした時間と経験がありました。



「この先生に学びたい」と選んだ進路
金澤さんが、現在の事業にもつながる研究に関心を持ったのは高校時代。自動車産業の盛んな愛知県で生まれ育ったこともあり、自然と自動車の開発に興味を持つようになったといいます。中でも、金澤さんが強く惹かれたのが、電動化が進む自動車を支えるパワーエレクトロニクス。「その第一人者である山本真義准教授(当時)の研究室で学びたい」。その思いから、島根大学への進学を決めました。



名古屋大学トヨタ講座の塩崎先生(写真右)の研究グループと共に、世界で初めてGaN半導体を使用して電気自動車を駆動させた思い出深い記念写真。

単に論文を書くための研究ではなく、実際の現場で使われることを前提に考える。複数の企業や関係者と調整しながら、一つのプロジェクトを前に進めていく。その経験は、学生の立場でありながら研究と社会との距離を具体的に感じる時間でもありました。
研究に没頭する中で「この結果を社会で役に立つ形にしたい」という思いが湧いてきたという金澤さん。地域に島根大学の研究シーズを社会に活かそうという機運があり、制度や地域の雲州志士会というネットワークが整っていたことも、経営者として社会実装を目指す決意を後押ししたといいます。

何度も行き来する日々。共同研究先として関わった企業数は30社を超えました。
社会実装に向けて加速し続ける日々
株式会社ナチュラニクス設立から10年経った現在も、長寿命で高効率なエネルギー技術の研究開発という事業の軸は当時のまま。企業や行政と連携して実証実験を重ね、社会に導入するための仕組みづくりに取り組んできました。
これまでに、日本製リチウムイオン電池をベースにしたバッテリーパックや充電器を独自に開発してきたナチュラニクス。現在は、大手企業との協業のもと、電動バイクタクシー向けのバッテリーサブスクリプションサービスの実証実験に取り組んでいます。2024年には、タイ・バンコクにおいて、電動バイクタクシーのドライバーを対象としたバッテリーサービスの実証実験を実施。高温多湿という気候条件や現地の利用実態を踏まえながら、サービスとしての使い勝手についての検証を進めてきました。さらに2025年12月からは、対象となる台数やエリアを拡大し、サービス提供のあり方も視野に入れた本格的な実証段階へ。実運用に近い形で検証を重ねながら、バッテリーサービスが事業として成立しうるかどうかを見極めるフェーズに入っています。



電池技術の提供ではなく、AIによる使用・劣化状況解析や、ユーザーの利用データに基づく最適化であり、製品の長期利用・循環型利用(リユース・リパラス)を前提とした新たなビジネスモデルの実現でもあります。これらは、環境負荷の軽減や持続可能なモビリティ社会の構築といった社会課題に向き合う取り組みとしても注目されています。
「学生時代に企業や多様な立場の人と協働した経験が事業の土台。今も変わらず、実際に社会の中で活かされるものづくりがしたい」と思いで経営を続けています」と話す金澤さん。島根大学で始まった学びは、研究室の外へ飛び出し、多くの企業とつながり、そして世界へと広がり続けています。

11 years later





特集 1
努力とセンスが光る。活躍する島大アスリート。
飛び込みでオリンピックを目指す 須山 晴貴さん

島根大には多くの運動部があり、学生たちは日々練習に励んでいます。今回は飛び込み競技で、日本のみならず国際大会でも活躍し、優秀な成績を収めている水泳部の須山さんをご紹介します。

須山 晴貴さん
教育学部 体育 水泳一学級 1年

美しさを競う飛び込みで日本を代表する選手に
2016年9月に開催された日本の学生選手権で、男子3m飛込みで優勝。11月の全日本学生選手権でも、男子3m飛込みで優勝。現在は、教育学部水泳部で練習中。将来的には、オリンピックを目指す。須山さんは、飛び込み競技で、美しさを競う選手として活躍しています。

当時の記事
「広報しまだい」vol.31 2017年1月号

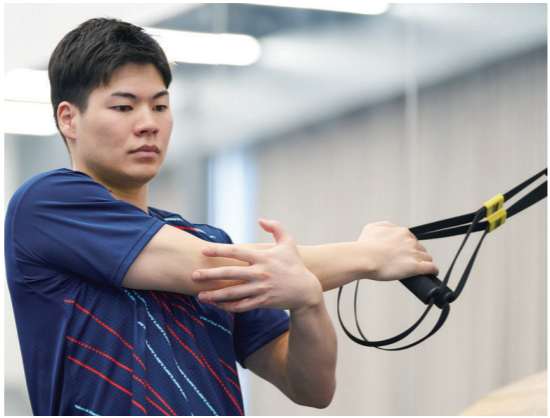
国際大会でも活躍し、優秀な成績を収めている島大アスリートとして紹介。競技への思いや練習内容、今後の目標などが一問一答形式で特集されました。



飛び込みの日本代表として、 未来に挑み続ける。

2028年に開催予定のロサンゼルスオリンピックを目指し、飛び込みの選手として日々トレーニングを重ねている須山晴貴さん。現在は、宇都宮市にある日環アリーナ栃木を拠点として、日本水泳振興会のサポートによりアスリート社員として活動しています。ハードな練習を中心とした生活を送る背景には、競技以外にも視野を広げ、さまざまな葛藤を乗り越えた大学時代の決意がありました。

大学時代に学んだのは決断する勇氣
飛び込み競技でこれまで数多くの入賞経験を持つ須山晴貴さんが、飛び込み競技を始めたのは小学生の頃。姉の影響で始めてすぐに才能が開花したことで本格的に指導を受けるようになり、次第に飛び込み中心の生活になっていきました。その後、中学、高校と進むにつれ、練習の比重はさらに高まり、放課後や休日の多くをプールで過ごすようになりました。技の完成度や記録を高めるため、繰り返し同じ動きを確認し、身体と向き合う。高校時代までは、家族や友人と過ごす時間も削り、飛び込み競技のことだけを考えて過ごす毎日だったとい



高校時代にインターハイや国体で優勝したことで将来を嘱望され、さらに競技に真剣に打ち込もうと決めた須山さんが進学先として選んだのは、生まれ育った地元・松江にある島根大学。「さまざまな分野を学ぶ仲間と交流することで、飛び込み競技以外の世界を知ることができたのが大学時代だった」と振り返ります。

大学3年になった須山さんを襲ったのは、それまでにないスランプ。一時は飛び込みをやめることも考えたといいます。将来について改めて考えるようになった須山さんを支えたのは、スポーツを研究する久保研二准教授(当時)と同じゼミの先輩、同級生でした。「競技を続けること」「別の道を選ぶこと」も自分で決めていいんだ。久保先生との対話の

島根大学で見つけた、競技者の決意 9 years later

中で、そう気づいた須山さん。「オリンピックを目指せるのに、ここで競技をやめてしまうのか」と自分に問いかけ、続けなければならぬ義務ではなく、続けたいという意思だと捉え直した須山さんは「今しかできないことをやろう」と決意しました。

自ら選んだ競技人生を輝かせるために

飛び込み競技を続ける道を選んだ須山さんは大学卒業後、栃木県宇都宮市にある日環アリーナ栃木で練習を軸に生活を組み立てる日々を送っています。アスリート社員としての須山さんの一日は、その大半を練習が占めています。それに加え、飛び込み教室やキッズスイムでの指導、大会の準備や運営補助など、競技を続ける環境を支える立場も担っています。「目標に向かって練習を続けるということ自体はずっと変わらないですが、以前とはモチベーションが違います」と話す須山さん。「多くの人に応援していただき、支えていただいている。だから、結果で恩返ししたいんです」。自分ひとりのためだけではなく、多くの人の思いを背負って競技に立つ。その強い気持ち

が今の須山さんを前に進ませています。

島根大学時代に培った経験が生きていると感じる場面も少なくないという須山さん。練習仲間や指導者、運営に関わる人たちが立場の違う人たちとの

関わりの中で、相手の立場を考えながら関係を築くことも、学生時代に学んだことが大いに役立っているそう。恩師である久保先生との変わらぬ縁も支えになっています。

大きな目標は、2028年のロサンゼルスオリンピック出場。その道は決して平坦ではありませんが、須山さんは現実的な距離感で目標を見据えています。そして競技人生の集大成として捉えているのが、2030年に島根で開催が予定されている国民スポーツ大会への出場です。競技人生の中で積み重ねてきた経験を、育ってきた場所や支えてくれた人たちにどう還元できるのか。そして競技の先に、どんな未来が待っているのか。その問いを胸に、須山さんは今日もプールに立ち続けています。



2025年5月開催のAmerican cup。成績は男子3m3位、男子シンクロ優勝。「肩の怪我があるなか、結果がついてきた思い出深い大会。まだまだ成長できるし、伸び代を感じる瞬間でした。」と須山さん。

NEW ShimaDAY



※制作段階の画像です。



課題先進地・島根から
世界の未来を変える。

特集 2 特別鼎談

左から松本学長特別補佐、大谷学長、河野副学長

このままでは、次の世代にバトンを渡せないという危機感
大谷 豊かな自然や文化に恵まれた日本では実感しにくいのですが、実は私たちの文明が、地球の限界を脅かし始めています。典型的な例が、AIです。非常に便利で役に立つ一方、自律的致死兵器のように、人間の意図を超えてターゲットを殺めうるレベルに達しているものも既に存在し、AIが人間の知能を超える転換点が刻一刻と迫っています。核の問題も同様です。今、真剣に「持続可能な未来」について考えなければ、この先の世代にバトンを渡せるかどうかが危機的な状況になってきています。
松本 振り返ると、SDGs(※1)が生まれたのも、21世紀に入り『世界が平和で豊かな状態を目指すためには、どうすれば

ばよいか』を国連で話し合ったことがきっかけでした。実はSDGsの前身には、MDGs(※2)という、2000年から15年間をかけて達成すべき8つの目標がありました。これは主に開発途上国の貧困や飢餓を救うためのもので、日本のような先進国では広く一般に知られることはありませんでした。しかし、15年の間に飢餓や貧困で亡くなる人が半減するなど大きな成果を上げたことを受けて、次は先進国も含めて地球全体で取り組もうと始まったのが、SDGsなのです。現在は、かつてのように「環境か経済か」という二極化の議論では、解決できない複雑な世の中になっていきます。平和、教育、ジェンダーなど、17の課題を同時に解決しない限り、本当の豊かさは得られない。「風が吹けば桶屋が儲かる」ではないですが、

※1. SDGs(持続可能な開発目標) 2015年に国連で開催された持続可能な開発サミットで採択され、2030年までを期限として、世界全体で環境・社会・経済等の持続可能性を実現し、誰一人取り残さない世界を目指して作られた17の国際目標。
※2. MDGs(ミレニアム開発目標) 2000年に国連ミレニアム・サミットで採択され、2015年までを期限として、発展途上国の貧困・教育・保健等の深刻な課題を解決し、人間の基本的な生活水準を向上させることを目指して作られた8つの国際目標。直接的なSDGsの前身という位置付け。

地球規模の危機が深刻化しているなか、本学は「持続可能な未来」への挑戦を続けています。大学が果たすべき社会的使命と人づくりの可能性について、大谷学長、河野副学長、SDGs担当の松本先生が語り合いました。

大谷浩 × 河野美江 × 松本一郎
島根大学学長 (SDGs・ダイバーシティ担当) 副学長 (SDGs・ダイバーシティ担当) 学長特別補佐 (SDGs担当) 教育学部教授

島根大学とSDGs

島根大学ウェブマガジン「ShimaDAY」は、大学の取り組みや研究成果をお伝えするだけでなく、学生・教職員・地域の皆様一人ひとりの想いや挑戦を通して、大学がどのような未来を描いているのかを発信するメディアです。研究や教育の最前線で生まれる知見、学生たちの等身大のキャンパスライフ、地域と連携した取り組みや日常の風景……。それぞれの物語を丁寧に掘り下げ、知的でありながら親しみやすい表現でお届けすることで、島根大学の魅力や価値を立体的に描き出します。
そして「地域とともに生きる大学が創る知のコミュニティ」をコンセプトに、島根大学に関わる多くの方々とともにこのウェブマガジンを作り上げていきます。読者の皆様からの問いに教員が応える双方向企画や学生自身が執筆する記事などを通して、大学に関わる人々の声が集い、つながり、広がっていく場であることを大切にしていきたいと考えています。
受験生や保護者の皆様にとっては大学を知る入口として、在学生・卒業生にとっては誇りやつながりを再確認する場として、そして地域や社会の皆様にとっては未来をともに考える対話の場として。「ShimaDAY」は、多様な人々とともに育ち続ける島根大学の「今」と「これから」を伝えていきます。

注目の連載コンテンツ

新しいウェブマガジン「ShimaDAY」は、こちらから

Campus Note

学生自身の言葉でつづられる「Campus Note」は、島根大学で学ぶ日々のリアルな姿をお届けする学生執筆コーナーです。授業のこと、研究や課外活動、友人との時間や何気ない日常生活。学生目線だからこそ見えてくる、等身大のキャンパスライフを通して、島根大学の「今」を感じていただけます。

みんなのShimaDAY

読者の皆様から寄せられた素朴な疑問や、ちょっと気になる話題に、幅広い研究分野を誇る島根大学の教員陣がわかりやすくお答えします。学問の最前線の話から、ふとした日常の「なぜ？」まで、読者と大学がつながり、対話を通して知る楽しさや新しい発見を共有する、双方向型コーナー「みんなのShimaDAY」です。

すべては連動しており、ひとつの解決が他へ波及するという意識が不可欠です。河野 解決すべき課題が多様化していますが、それだけ救われる範囲が広がったと捉えることもできますよね。私は、本学のダイバーシティ担当でもあるので、90年代には経済成長や平和がメインだった議論にジェンダーのトピックが加わったことは、非常に大きな意味があると感じています。SDGsでは、17のゴールを2030年までに達成することを目標に掲げていますが、現在の達成率はどの程度なのでしょう。

松本 毎年発表される国連のレポートでは、50%程度と評価されています。ただ、目標ごとに差があります。再生エネルギーが台頭したことでエネルギー問題が進展した一方、戦争と平和の問題に関しては、かなり後退してしまっている状況です。残りの年数をかけて、すべてのゴールの達成率を限りなく100に近づけることを目指し、これまで以上に努力を続けなければなりません。

課題先進地として解決策を示し 島根から世界の未来を変える

大谷 17の目標達成を同時に進めるのは非常に困難で、どれかを良くしようとする別の目標に負荷がかかる、ということが頻繁に起こります。この複雑な問題

を科学的なデータに基づいて解決モデルを示すことができるのは、やはり大学であると私は考えています。とくに本学のような、文・理・医・教をバランスよく備えた地方の総合大学にこそ、その役割があるのではないのでしょうか。なぜかという、都会から離れていることは一見不利に思えますが、実は中央の影響を受けすぎず、研究の自由度が高いという大きなメリットがあるからです。

松本 島根県は地域のスケールがほどよく、学生の活動や研究成果が松江市や出雲市にすぐ届き、その影響も街の中で実感されやすい点が大きな魅力です。知識を机上の空論とせず、人々の暮らしや現実に寄り添えるという特性があります。大学は、学生が社会に出る前の最終ゲート。ここで意識の高い人を育てることは、SDGsの目標4『質の高い教育をみんなに』にも直結します。世界を動かしているのは人間ですから、一人ひとりの意識が変われば、明日にも平和が訪れるかもしれません。そのための（人づくり）こそが、大学の大きな使命のひとつでしょう。

大谷 もうひとつ。島根県は、課題先進地です。少子高齢化、交通・医療の崩壊危機など、日本全体、あるいは世界が直面する課題がすでに表面化しています。昨年、海外出張に行った際に、インドや中国の方から『島根は日本の中でも、少子高齢化が

進んでいると聞いている。地域、老年を対象にした医療・看護・福祉の先進的な知見を教えてください』とリクエストをいただきました。海外の方も同じ問題意識があるんだな、そして我々と同じくまだ解決策が見えていないんだなと実感しました。人間のアクティビティが全ての基本なので、人が減ると経済活動が弱り、医療が受けられなくなったり、交通が不便になったりと、どんどん消滅の危機に瀕します。島根県から、持続可能な地方モデルを発信できれば、後に続く地域や国々の希望になります。本学には現在、松江キャンパスと出雲キャンパス合わせて約6,000人の学生がいます。多様なバックグラウンドをもつ若者が全国から島根に集まっております。これは少子高齢化が進む島根県にとって非常に大きな知の財産であり、エネルギーの源です。この6,000人の若者の力が地域の皆さんと混ざり合うことで、島根県から解決策が生まれると信じています。

地域の未来を動かす若者の力

大学公認「SDGs ユニット」始動

大谷 〈持続可能な未来〉を叶える取り組みのひとつとして、2025年度から『SDGs ユニット認定制度』を立ち上げました。地域や学内で、持続可能な社会への取り組みをしているサークルな

学生からは『今後、ぜひSDGsに取り組みたい』という声が聞かれましたし、私自身も〈地域や企業を巻き込んで、こんなことまでしているんだ！〉と驚くような活動もあり、非常に手ごたえを感じています。個人的には、ここから起業する学生が出てくるのではと期待しています。

河野 どのユニットの発表も本当に素晴らしいかったです。あえて言うならば、ジェンダーや多様性に関するユニットがなかったのは少し残念でした。島根県は、若い女性が都会へ出てしまう傾向が強く、女性にとって魅力的な場所になりきれしていない側面があります。もっと若

い世代が声を上げられる環境を作っていかねければなりません。学生たちの、今後の奮起に期待しています。

大谷 大学公認となることで、学生は自分たちの活動に自信をもって対外的に発信できるようになります。これにより学生だけでなく、地域の方々をも巻き込んで、SDGsへの意識を高めることができます。17の目標を達成するためには〈誰かがやる〉ではなく、全員が〈自分事〉として捉える姿勢が不可欠です。今後は学生の熱量を市民や企業の皆さんに繋げ、現場の課題と一緒に考えたり、若者の柔軟なアイデアをビジネスのヒントにしたりとといった連携を深めたいと考えています。市民や企業の皆さまは、ぜひ学生に『こんなことを一緒にできないか?』と気軽に声をかけていただきたいです。

大学は質の高い生活(Well-being)の実現に貢献する場所

研究と地域を繋ぐ島根大学の挑戦

大谷 研究においては、これまでにないような尖った価値を生み出すことが期待される一方、それが地球の限界を超えないようにどうバランスを保つかが、非常に本質的で難しい問題です。例えば、人の健康を助けたり身体をサポートしたりする技術は、そのまま兵士を強くして戦場へ向かわせるといった、軍事転用

などを募り、現在14ユニットが大学公認のもと活動しています。循環型農業に取り組む『里山焼かんかね?』、子ども食堂の運営支援を行う『すみれ食堂』、地域の鉄道を盛り上げる『鉄道研究会』など、活動内容は多岐に渡ります。

河野 学生たちは、日頃の部活動やボランティアが、SDGsに繋がっていると気づいていないことが多いです。それを『あなたの活動は、SDGsのこの目標に該当する素晴らしいものなのだ』と伝え、そして意識的に取り組んでもらえるように、この制度を作りました。

松本 1月に開催した中間発表会も、非常に熱気に満ちていました。市の関係者や市民団体の代表にもお越しいただき、学生たちのモチベーションも飛躍的に高まっております。まだ活動に取り組んでいない



SDGsユニット活動の中間発表会の様子。令和7年度に認定された14ユニットのうち、7ユニットがこれまで取り組んできた活動について発表を行いました。

のでしょか。人々の生活に直結する課題の解決は、大学の大きな社会的使命です。本学でもたくさんの先生が、研究に励まれておられます。大学が〈偉そうな人たちが集まる場所〉ではなく、誰もが質の高い生活を送れ、Well-beingの実現に貢献する場所であることを、今後もっともっと発信していきたいです。そしてみんなで見つものに、持続可能な未来を創っていくのが私の理想です。

大谷 学生の活動をSDGsユニットとして大学が公認して見える化しましたが、近く研究者や教職員のSDGsユニットも立ち上げる予定です。『我々はSDGsに繋がる、こんな研究をしています』と積極的に発信し、学内の知を地域の皆さんや企業の皆さんの熱量と掛け合わせたい。そうして、島根から〈持続可能な未来〉に向けた確かな手応えを作り出してまいります。

松本 SDGsは2030年で一区切りですが、人類の持続可能性への戦いは、その後も名前を変えて、ずっと続きます。理想は、SDGsという言葉を使わなくても、誰もが生き生きと働き、自分らしくいられる社会が実現すること。2030年の先には、より人間らしい生きがいを目指す目標が待っているはず。そこへ繋げるためにも、今をどう生きるかをみんなで考えましょう。





里山焼かなかね？

島根大学焼畑サークル

伝統的な「焼き畑農業」で、里山を守り抜く

里山を救う循環の知恵
放置竹林を豊かな畑に
 かつては日本全国の山村で見られていた、伝統的な焼き畑農業。環境破壊への懸念や過疎化による人手不足で衰退しましたが、外部資源に頼らず森林の再生力を活かす循環性や、休閑による生物多様性の保護といった利点から、近年、持続可能な農法として再評価されています。奥出雲町の『ダムに見える牧場』を拠点に活動する『里山焼かなかね？』のメンバーたちも「火を使うことは危ない」という意識を変え、その恩恵を伝えたい」と声を揃えます。活動には、文系理系の枠を超えた学生が参加しており、達成に資するSDGs目標は「13. 気候変動に具体的な対策を」と「15. 陸の豊かさを守ろう」です。

彼らが焼き畑に取り組む最大の目的は、深刻化する里山の放置竹林問題と、それに伴う地域課題の解決。手入れの届かない竹林が民家に迫り、イノシシ、シカ、サルといった野生動物の隠れ場となって害獣被害を招くことが、山村の大きな脅威となっています。また、成長した竹が民家の床を突き破る被害も増えています。こうした状況に対し、学生たちは焼き畑の手法を通じて、里山の適正な管理と再生を試みています。

活動は、一年を通して行われます。最も過酷なのは、3〜5月に行う竹の伐採。急斜面に立ち、ノコギリを使って手作業でひたすら竹を切り続けるので体力勝負です。6月になると、切った竹を並べて火をつけ



焼く場所は、毎年変更。作物を収穫した後の畑は数十年ほど休ませ、畑がまた肥えるのを待ちます。持続可能なサイクルを保つための知恵です。

る「火入れ」を行います。炭には多孔質な特性があるため養分や水分が保持されやすく、その結果、農薬や化学肥料を使わずとも有用な微生物が住み着き、栄養豊かな土壌が形成されます。12月にはそこで収穫した里芋で芋煮を作り、地域住民たちと分かち合う「収穫祭」を開催。交流の場であると同時に、焼き畑の有用性や竹林問題を広く周知する大切な機会となっています。

行政と連携して有機農法に関する講演会も開催しており、部長(当時)の生物資源科学部4年の岡田愛世さんは「農薬や化学肥料を使わなくても作物は作れるという意外性を知っていただくと同時に、自然環境に思いを馳せてもらう機会にしたい」と意気込みます。伝統の知恵をSDGsへとつなぐ彼らの真摯な活動は、島根の里山を守る大切な一歩となっています。



島大すみれ食堂

子ども食堂ボランティアサークル



食を起点とした「居場所づくり」に取り組む

貧困支援のその先へ
心を繋ぐ子ども食堂
 2025年5月に発足した『島大すみれ食堂』は、子ども食堂の支援を通じて地域交流を促進するサークル。サークル名には黄色いスミレの花言葉「小さな幸せ」や「日常のささやかな喜び」という意味を込めており、月数回の活動を通じて、参加者が温かな絆を実感できる場づくりを目指しています。貢献するSDGs目標は「1. 貧困をなくそう」「2. 飢餓をゼロに」「3. すべての人に健康と福祉を」「11. 住み続けられるまちづくりを」「17. パートナリーシップで目標を達成しよう」と多岐にわたります。

設立の契機は、総合理工学部2年の佐藤一喜代表が、高校時代に経験した子ども食堂でのボランティア活動。食を通じて地域住民との交流に楽しさを感じ、大学進学後も活動を継続するなか、教員からの勧めでサークル化を決意しました。子どもと年齢が近い大学生が主体となって活動することで、より親密で楽しい空間を提供できると考えたのです。現在は、地域の子どもの食堂の運営補助を軸に、夏祭りやクリスマス会での独自の企画提案など、交流の質を高める工夫を凝らしています。こうした想いに賛同した企業が協賛してくれることも増え、活動の輪は着実に地域社会へと広がっています。

活動の根底にあるのは、佐藤代表の「第2の居場所」への強い想いです。スマホひ



「食事+α」の取り組みに注力することで、子ども食堂を単なる食事の場から、さまざまな世代が集う「地域交流拠点」へと進化させようとしています。

とつて生活が完結する便利な現代ですが、その裏で孤独や虚無感を抱える人々は少なくありません。「今の生活に充足感を持ってない人々に対して『ここに来れば、誰かと笑い合える』という安心感を届けたい」と意欲を見せます。子ども食堂「貧困支援」という従来の固定観念を超え、世代や立場を問わず、誰もが人と人の温かな繋がりを感じられる場所を守ることとまた、『島大すみれ食堂』の大きなモチベーションです。

今後はSDGs目標「4. 質の高い教育をみんなに」を見据えた食事前後の学習支援も導入し、より多角的で柔軟な支援の形を模索する方針。最終的には、自分たちの手で一から子ども食堂を設立・運営することを大きな目標に掲げています。デジタル化が進む現代だからこそ、対面で集う価値を尊ぶ彼らの挑戦は、地域社会へ確かな「小さな幸せ」を届けています。

